

# 演劇の制作と上演「制作日本語Ⅱ」報告 —コース設定、コース運営を中心に—

柳田 しのぶ

## 要 旨

2014年度から2016年度にいたるまでの制作日本語Ⅱで実施した演劇の制作と上演の報告を行う。主にコース設定、運営の面を紹介し、実施したことで見えてきた諸課題とともに学期ごとの活動について報告する。

【キーワード】 演劇発表 台本 コースデザイン 演劇ワークショップ

## A Report on the Theater Seminar “Japanese Project Ⅱ” : Course Design and Management

YANAGITA Shinobu

**【Abstract】** This is a report on the theatrical exercises in the “Japanese Project Ⅱ” class from 2014 to 2016. I mainly introduce aspects of course setting and management, and report on the activities of each semester as well as the encountered issues.

**【Keywords】** theater presentation, drama script, course design, work shop

## 1. はじめに

近年、川口(2012)、河合(2015)のように演劇を取り入れた日本語教育活動が注目されるようになった。川口は初級の日本語学習者を対象とした文脈化を利用した演劇要素を含んだクラス活動について、河内は初中級の日本語学習者を対象とした演劇作品の作成について報告している。演劇的手法を取り入れた授業とは、単にロールプレイやドラマを作成するものではなく、学習者が参加・体験型の活動を通じて、読み、書き、話、聞くことを主体的に学ぶ総合授業である(杉山2014)。筆者は杉山の解釈に加え、演劇は客観的にも4技能を学べる素材だと考える。会話の基本である「相手とのやり取り」という観点からみると、演劇は台本に基づき、その場面に適当な会話を目指して学習者は自分自身の個性ではなく「演じる役」として舞台に立つ。その制作過程では、野呂(2009)が「話し言葉の運動場」と例えるように、学習者は様々な言語表現を何度も繰り返す。その際、学習者はどうすれば観衆にとってより自然なやり取りに見えるか、発音、アクセントは、といったように「演じる役」を通して客観的に自身の日本語をとらえることができる。このように、日本語教育において演劇は主観的にも客観的にも体感できる生きた素材だといえよう。本稿では、筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター(以下CEGLOC)日本語教育部門で開設された「制作日本語Ⅱ」において、2014年から2016年の各年度に演劇の制作と上演を行った実践について報告する。なお、演劇の制作および発表を行う本コースは、筑波大学において留学生に向けて開講されたコースでは初めての試みであった。

## 2. 制作日本語Ⅱで実施した演劇の制作とは

制作日本語Ⅱとは、日本語中上級レベルの短期留学生を対象とした15回にわたるコースの一つである。1年間に春学期と秋学期の2回開講された。このコースは15回で終了するため、春学期と秋学期の受講者は異なる。日本語を使用して成果物を「制作」するコースであり2014年度からの制作日本語Ⅱでは、演劇を素材として演劇の基礎を日本語で体験しながら、実際に演劇を制作し発表を行った。コースでは、演劇の制作を通じて日常話す日本語の自然なやり取りを身につけることを目的とした。制作には、具体的に台本作成、演出、大道具や小道具の作成、衣装デザイン(場合によっては作成)、音響選出、照明デザインがあり、それらを受講生で分担し、さらに受講生自身が役者となり演劇作品を制作した。コース内では中間発表と期末発表と二つの演劇発表を行った。しかし中間発表と期末発表とは、発表の目的が異なる。受講生のほとんどが演劇未経験者であったため、中間発表では、実際に演劇を体験するいわゆる「お試し」の要素を含んだ。期末発表では、すべてを受講者にゆだね演劇発表を目指した。

毎回の授業には、日本人ボランティア数名が参加し、学習者の演技と日本語のサポー

トを行った。日本語のサポートとは、演劇発表の際に観衆が不自然に感じない日本語の言い回しやアクセントへの訂正である。日本人ボランティアは筑波大学の全校生徒が見られる掲示板、または筑波大学の演劇サークルに問い合わせることで募集した。一度参加したボランティアが次の学期も継続して参加したり、ボランティアが後輩を紹介したりする場合もあり、2014年度からのコースで日本人ボランティアが一人もいないという学期はなかった。

コース前半（第1週～第7週）では、声を大きく出すための発声練習、発話に対する反応、感情の表出、相手に声を届ける方法、インプロビゼーション等の演劇要素を含むワークショップと、練習台本を使用しての演技練習を行った。演劇ワークショップを前半に集約させたのは、演劇経験が少ない、または未経験の受講生に演劇自体を体感してもらうためである。また、演劇の手法を体験し練習台本でそれらを使うことで「演じる」ことへの恥かしさ、照れを払しょくする目的もあった。練習台本は教師が作成したものを使用した。以上のことが主な目的であったため、出演者4名上演時間10分という短い作品だった。中間発表ではその練習台本を使用した。



図1 中間発表の様子（2016年度春学期より）

コース後半（第8週～第15週）は、受講生が個々に作成したオリジナルの台本の中から1作品または2作品選出し、1作品の場合は受講者全員で、2作品の場合は受講者を二つのチームに分けて演劇発表を目指した。演劇発表の会場は、大学構内のホール、大会議室、マルチメディアルーム等、通常使用している教室以外の場所を使用し、ホール以外の場所では照明・音響機材を大学から借用し舞台を設営したうえで無料の演劇公

演として筑波大学の学生、教師等、CEGLOC 日本語教育部門の関係者を観客として招待した。発表場所を教室ではなく本格的な舞台としたのは、受講生の演劇発表へのモチベーションを上げること、また「見せる」ことへの意識を高めるためである。なお発表は第14週に行い、第15週ではフィードバックを行った。フィードバックは、撮影した演劇発表の映像を見ながら、自己評価・他者評価の二通りの振り返りを行った。



図2 期末発表の様子（2015年度春学期より）

中間発表から期末発表への主な流れは2014年度から基本的に変更はないが、2016年度春学期から期末発表の準備により時間を使えるように中間発表の日程を7週目から6週目に変更した。期末発表は中間発表より制作する演劇作品の自由度が上がるため、練習時間の確保として変更は妥当だと思われる。

### 3. コース運営

全15回のコースにおいて、前半は演劇に慣れること、演劇の作り方の実演、演劇ワークショップというような主に演劇についての導入というように、教師主導のワークショップ形式で実施した。前半に行った中間発表も台本は教師作成のものであり、受講生にとっては半受動的な活動となった。演劇の手法、手順を受講生に理解させ、活用できるようにさせることが、この期間の教師の主な役割でもあった。その反対に後半は受講生主導で授業を進め、実際の演劇の制作を主な授業活動とした。受講生と日本人ボランティアが演劇を制作しているなか、教師はタイムキーパー、またはスーパーバイザーとして制作にたずさわり、受講生の意見、アイデアを第一に考え、それが実現可能か不可能かについて所言した。具体的な例としては、ホール以外の会場で照明を天井から使用したい

という生徒の要望に、設備上天井に照明を吊るすことができないため、代案を提示したケースがある。

制作日本語Ⅱにおいて、日本人ボランティアの協力は大変意味のあるものだった。日本人ボランティアには、各グループ内に一人ないし二人に入ってもらい、場合によっては演技も一緒に練習してもらった。実際に受講生のグループに入って一緒に活動してもらうことで、教師よりも近い位置で日本語の訂正、演劇に対する率直な意見等を受講生にかえすことができた。さらに日本語ボランティアが入ることによって、教師はより俯瞰してコースを運営することができた。

#### 4. 演劇ワークショップ

ここでは、毎学期の前半に行った演劇ワークショップについて報告する。ワークショップは、主にアイスブレイキング、演劇の手法の二つがあった。以下行った主なワークショップを具体的に紹介する。表はそれぞれのワークショップの詳細である。

表3 グループ別出身国

	内容および手順
無言で誕生日順に並ぶ	円になり、言葉を発さずに身振り手振りのみで誕生日を伝え誕生日順に並ぶ。
名前覚え①	円になり、中心に一人立つ。その一人は円の中の一人に向けて自分の名前を言う、円の人物も中心の人に向けて自分の名前を言う。2回繰り返し握手をして入れ替わる。繰り返し行う。
名前覚え②	円になり、最初の人自分の名前を言う。次の方は以下のよう名前を言う。「(最初の名前)さんのとなりの(自分の名前)です」繰り返し行う。

アイスブレイキングとして実施したものは、コース初期に実施し、受講者同士がクラス内で活動しやすい環境にすることが主な目的であった。演劇以外のクラス活動としても、初回の受講生の緊張をほぐすことを目的として使用可能である。

表2 演劇ワークショップ

	内容および手順
寸劇「ありがとう」	3人または4人程度のグループを作り3分ほどの寸劇を制作する。寸劇の最後の台詞を「ありがとう」で統一し、打ち合わせ時間は3分から5分程度。その後グループごとに発表する。
声を飛ばす	横一列後ろ向きにならび、一人はその3メートル程度離れたところに立つ。指定の言葉(例:ありがとう)を後ろ向きに並んでいる特定の人に向かって発する。後ろ向きの人が気づいたら成功。役割交代。振り向かなかったら同じ人にもう一度言葉を発する。3回しても気づかなかったら交代。
見えないボール	最初に「見えないボール」の色を共有する。(例:赤、白)円になり、最初の人にはボールの色を決める。言葉を発さずにアイコンタクトのみで手に持ったボールを次の人に渡す。繰り返して最初の人にボールが戻った時点で自分が何色のボールを受け取ったかをフィードバックする。
感情解放	台本を使用して、最初にローテンションとして感情を表出せずに読み、次にハイテンションとして感情を必要以上に出して読む。このローテンション、ハイテンションは、台本の文脈に関係なく全ての台詞で同じテンションを維持する。

演劇の手法として紹介したワークショップは、演劇経験の浅い受講生がわかりやすく演劇を体験できるように行った。上記のワークショップに共通していることは自分以外の人物への意識である。それには同じ舞台上に上がった相手、観衆も含まれる。相手を意識し「伝える」活動を行うことでより円滑なコミュニケーションがとれるようになることを目的とした。

表3 その他ワークショップ

	内容および手順
舌、頬のストレッチ	耳の下、顎のラインを親指で押しながらマッサージする。その後、口を開けて下を出したり引っ込めたりする。口周りをほぐして表情や言葉を出しやすくする。
正しい姿勢	ニュートラルの姿勢として提示。肩幅に足を開き、頭の中心から1本の糸で引っ張られていることを意識する。意識したまま、歩き、止まった場所でも同じ姿勢が保てるようにする。
腹式発声	腹部に手を当てて、呼吸している時に横隔膜が動いていることを意識する。意識したまま、声を発する。その時、大きい声を出すという意識は持たないように指示。
声の大きさを合わせる	各グループで声の大きさについて確認させる。声が小さい人は腹式発声をより意識させ、大きい人には、同じ声の大きさになるように調整させる。

その他のワークショップは姿勢や発声に関するもので、演劇以外の場面でも応用可能なものである。例えば研究発表、ゼミ発表等の自分から発信する場面で有効な手法だろう。声を発する機会は誰にでもある。特に大学生は前に立って発表する機会も多い。しかし、どのようにしたら大きな声が出るのかを具体的に指導する場は現状ない。話すクラス等でこれらのワークショップは応用可能であると考え。大きなはっきりとした発声で発表できることは学習者自身にとっても自信につながるだろう。

## 5. 期末発表実践報告（2014年度-2016年度）

ここでは、2014年度から2016年度にいたるまで、制作日本語Ⅱでの実践を報告する。期末発表では、受講者の作成したオリジナルの脚本を使用して発表した。各学期によって発表作品数が異なるが、これは各学期の受講者がミーティングによって決定したことである。会場については、発表日に使用可能な場所で発表したため、学期によって発表場所が異なる。ホール以外の場所には常設の照明機材はなかったため、大学の学生課から借用した。また期末発表はフィードバックで使用するためビデオで撮影した。2015年度春学期から2016年度秋学期までは、THK 筑波放送協会に依頼した。THK 筑波放送協会とは、筑波大の放送系サークルであり撮影は無償で行われた。

表3 その他ワークショップ

実施年度	受講者数	日本人 ボラン ティア数	作品数	期末発表タイトル	発表会場
2014年度 春学期	14	2	3	・鍵をかける！ ・幻の世界 ・目に見えない大切なもの	大学ホール
2014年度 秋学期	6	2	2	・赤いアクシデント ・サプライズ	大学ホール
2015年度 春学期	9	2	2	・濃い物語 ・シンデレラ	特別会議室
2015年度 秋学期	12	6	2	・勇者たちの冒険 ・少女売りのマッチちゃん	特別会議室
2016年度 春学期	8	6	1	・天使と悪魔	マルチメディア ルーム
2016年度 秋学期	4	4	1	・万事屋	特別会議室

期末発表は、第14週に行われ、第13週にリハーサルと称して期末発表と同じ場所・機材を使用し本番と同じ環境を整え練習を行った。リハーサルを教室ではなく実際の場所で行うことで、期末発表では受講者が慌てることなく発表できた。期末発表当日は、受講者は役者に専念し、受付案内・照明・音響等のスタッフワークについては教師と日本人ボランティアで行った。

### 5.1 全ての学期で見られた傾向

全ての学期で見られた点は、決定した台本は10分程度の作品であったが、練習を行い受講生同士のミーティングを繰り返すうちに台本の会話の容量が増え、物語が進み、期末発表時は15分を越える作品に仕上がっていた点だ。なかには17分を超える作品もあった。よって公演時間は、学期ごとに異なったが、2作品で30分程度、3作品で40分程度であった。観衆は先述の通りCEGLOC日本語教育部門の関係者であるから日本語学習者も多く、その日本語のレベルはゼロ初級から中上級と幅広かった。劇中、初級学習者の観衆にとっては難しい台詞もあったが、演劇の場合その場の空気感や体の動作等の非言語で伝える要素が多分があるので、すべてを理解できなくとも彼らは楽しめたようだった。演劇は舞台の上で完結するものではなく、観衆の反応があって初めて完成するものである。発表時間が完成台本やリハーサル時より長くなったのは、観衆の反応を出演している受講者が受け取り演技を行ったからということも一つの要因だと思われる。公演の途中で受講者の演技に観衆が反応して拍手が起こった場面がしばしばあった。観衆からの反応に、さらに反応して演技をすることができたのは、受講者が発表に心理的



な余裕を持って臨めたことのあらわれでもあるだろう。

## 5.2 受講生の内省

2015年度の春学期、秋学期の2回、コース終了後に受講生に対して内省調査を行った。調査はコースについてのアンケートとそのアンケートを基にしたインタビューであった。アンケートは「台本の制作について」「ワークショップについて」「演劇制作について」の3項目であった。以下それぞれの項目においての受講生のコメントをまとめたものである。

台本の制作について、多かった回答は「自然な日本語を表現すること」「どうやって面白くするか」というコメントだった。要約すると自身にとっての自然な会話を認識することになり、このコースの目的と一致している。さらに「観衆」を意識しながら台本を書いていることがわかった。

演劇ワークショップについて、多かった回答は「演劇の初心者には必要」「最初は恥ずかしかったが慣れた」「日常生活にも役に立つ」等でおおむね好評だったようだが、「何故するかわからない練習があった」「練習の効果がわからない」というコメントもあり、戸惑いながら参加していた受講者も少なからずいたことがわかった。

演劇の制作について、多かった回答は「メンバーとの交流が楽しかった」「授業以外に会って練習した」「アイデアを共有して台本に加えた」というものだった。先述のように決定台本よりも期末発表の演劇作品が長かったのはチームで作品を推敲しアイデアを共有し台詞や場面を増やしていたためだった。さらに「自分の演技が他人にどう見られているか、どう直せばいいか言われて自分が成長するのを感じた」のように自身を俯瞰して客観的に見ていたことが伺えるコメントもみられた。その際、携帯電話の動画機能がよく使われていたようだ。また、演劇制作の際、授業以外でもグループメンバーで会って練習やミーティングを繰り返していたこともわかった。

## 6. おわりに

2014年度から開講している制作日本語Ⅱでは演劇の制作と発表を行ってきた。2017年度現在も開講中である。実施最初の年度から2016年度までを振り返ることで、演劇の制作と発表という特殊なコースの傾向を把握することができた。演劇発表という目標が学習者に与えた影響は、日本語能力の向上だけに留まらず、仲間とのコミュニケーション能力等、目標達成に向けての総合的な能力に関して影響を与えたようである。さらに日本語を自然に話す環境としても、教師以外に日本人ボランティアが入ることで、学習者のモチベーションを上げられたものと思われる。加えて今回報告したコースは、大学内の施設、演劇サークル、映像サークルとの連携が機能したコースであった。学内のリソー

スを可能な限り活用したことで、日本語コースとしても「そと」に開かれたコースになったのではないかと考える。

以下、報告からみえてきたことから考えられる仮説である。以下2点の仮説を説明することを今後の課題としたい。

1. 受講生は演劇を通じて自身の日本語を客観視している
2. 役に対しての日本語の訂正は自身が訂正を受けた時より受け入れやすい

さいごに、このようなコースを運営するには、教師側にもある程度の演劇の基礎知識や技術が求められる。そのため演劇要素を日本語教育の活動に取り入れるということが敷居の高い印象を与えているのも確かである。より気軽に日本語教育の活動に取り入れるにはどうしたらいいのか。これも今後の課題としたい。

## 参考文献

- 河内千春 (2015) 「演劇を取り入れた日本語教育 - 「日本語でドラマを作る」 クラスの活動を中心に -」 『IAPL Journal』 第2号 :37-47
- 杉山ますよ (2014) 「演劇的手法を取り入れた活動の可能性」 『日本語教育実践研究フォーラム報告』 :1-10
- 川口義一 (2012) 「日本語教育における「演じること」の意味 - 「文脈化」で学ぶ文法 -」 野呂他 (編) 『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』 ココ出版 :59-77
- 野呂博子 (2009) 「演劇・ドラマ的要素を日本語教育に導入する意義 - 日本語コミュニケーション教育への提言 -」 『Journal CAJLE』 第10号 :25-42